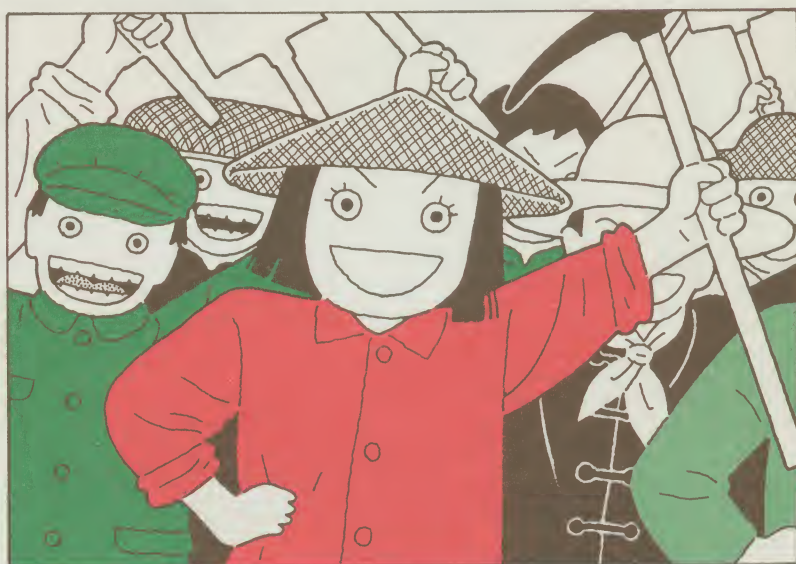
昔々、――と言っても今から30年ほど前のことですが中国の奥深い山の上に陳さんとゆう仙人が住んでいました。陳さんは仙人ですから中国が一九四九年に共産主義国家として新しく出発しても全然関係なく山の上で何もしないでダラダラと暮らしていました。でもそんな山の上にも時代の大波は押し寄せてきたのです。

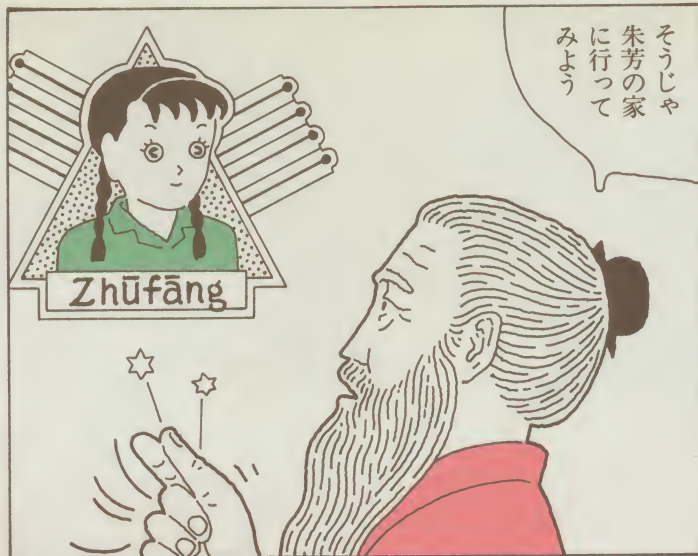
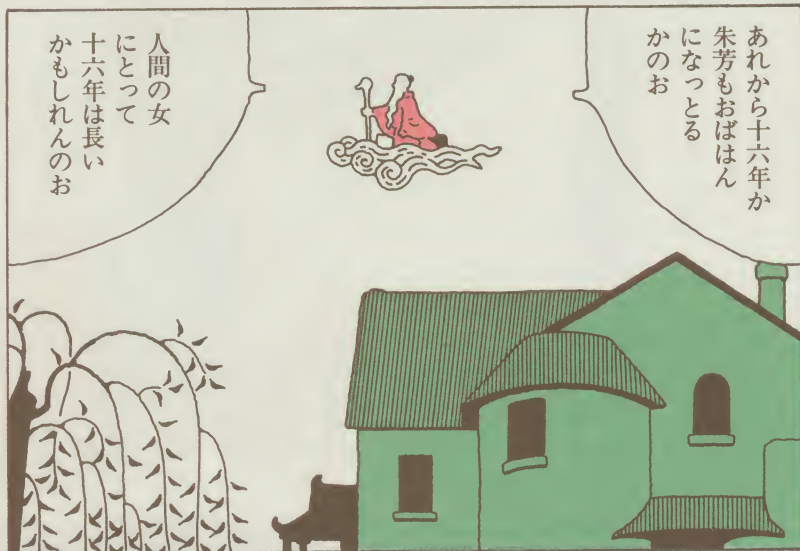
陳さん都会へ行く

ひさうちみちお

ある日、山の下の方が騒がしいので陳さんが雲に乗って降りてみると多勢の労働者や農民がシャベルやツルハシを持って山を登ってきます。

工業生産でイギリスに追つくというスローガンでスタートした大躍進運動が陳さんの住む山にもやって来たのでした。山を改造して発電用のダムを造るために人民が山を登ってきます。

これは引越しせんといかんと思って陳さんはあわてて自宅に帰り家財道具をまとめ出しました。でもまとめながら陳さんはどこへ行けば良いのかと考えてしまいました。

そうじゃ
朱芳の家に行ってみよう

Zhūfāng

中国は人口も多いが国土も広い。今、居るところが駄目なら別の山に行けば良いだけなのですが陳さんは平常心を欠いていました。なにせものごころついて以来千五百年近く何事もなかった山に突然紅い人民がなだれ込んできたのですから。

朱芳さんとゆうのは街の女性です。十五年前中国が国民党と共産党の内戦で燃えていた頃陳さんはブラリと街へ遊びに行って朱芳さんとセックスをしました。

と言っても朱芳さんは別に売春婦とかイケイケのかたではありません。朱芳さんは実は日本人なのです。日本が戦争に負ける直前に朱芳さんは両親を戦火でなくしました。それでも弟だけは日本に帰したいと思って父親の取引き先の商家の老人の嫁になりお金を工面しました。

そのお金で朱芳さんの弟は日本へ帰れたのですが朱芳さん自信はそれからつらい日が続きました。昼は老人の仕事を手伝ったり家事をして夜はセックスをさせられるのです。

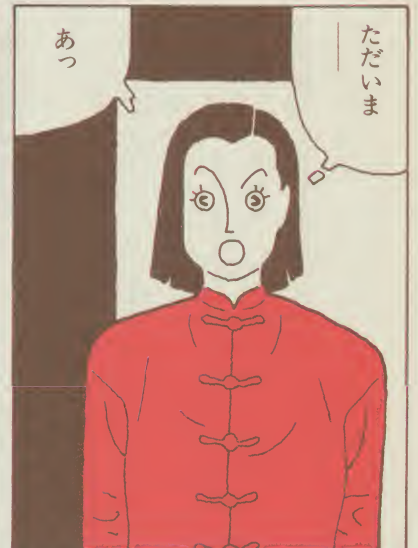
でも老人は夜に頑張りすぎたのか朱芳さんとするようになってから一年ほどたった頃死にました。

それで老人のセックスからは解放されたのですが一人でどうして良いのか分かりません。

そんな時に陳さんと知り合って陳さんは朱芳さんの家に住むようになったのでした。陳さんは街に来てからは普通の若者に化けていたので朱芳さんは老人とするより陳さんとする方が仕合わせでした。

陳さんも若い娘と夫婦のように暮らすのはまんざらでもなかったのですがあんまり俗世間に長居すると神通力を失うとゆう不安がつきまといます。それにずっと若者に化けているのも面倒です。

それで一年くらい一緒に暮らしてから自分の正体を明かし山に帰りました。
その頃には朱芳さんは一人で暮していけるようになっていたので陳さんは決心したのです。毛沢東が国民党軍を圧倒して新中国がスタートした頃のことです。

とゆうことはその子の歳かっこうから見て陳さんの息子でもありました。陳さんは朱芳さんと暮らしていた時にゴムもつけずに百回ぐらいしましたから朱芳さんが妊娠するのは当然です。

朱芳さんは陳さんを見て突然怒り狂いました。十六年前、若者に化けて自分を騙しただけでなく、お腹の子を置いてプイと山に帰ってしまったのですから無理はありません。

でも夜中にセックスをしたら少しだけ許してもらえたのでそれから親子三人で暮すことになりました。

ところで二人の息子は朱栄といいます。朱栄は母親が日本人なので反右派闘争以来ずっと日帝の鬼の子と言われ苛められながら育ちました。何度か母を恨んだことがありますが女手一つで一生懸命働きながら自分を育ててくれたことを思うと恨みきれないのです。

だからせめて自分も一生懸命革命に励んで共産主義青年団に入り出世して苛めた奴を見返してやろうと思っていました。

無論、党員の子弟か有力なコネでもなければ健気にボランテアしてるだけで入団できるほど甘くはありません。

それでも前向きな朱栄でしたが突然変なじいさんが来て父親を名乗り家に住みつくようになってからは再度母親が信じられなくなってきました。

そんな時驚天動地のあのプロレタリア文化大革命が発動されたのです。

天安門広場で毛首席に謁見する紅衛兵が出現してからは少年達にとって時代の前衛は青年団ではなくなりました。でも無論紅衛兵もまた出身が良くなければなれません。

天安門城楼の上で毛沢東の左腕に紅衛兵の腕章をつける北京師範大附属中学の宋彬彬

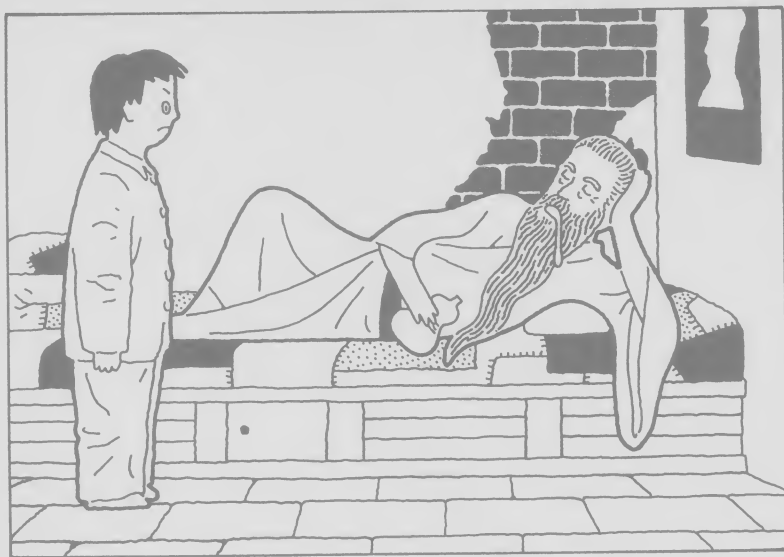
紅五類(労働者、農民、解放軍、革命幹部、革命烈士家庭)が条件ですが労働者や農民も代々貧しい家庭でなければ駄目なのです。でもコネがなくても本人の思想とその表現によって可能性はありました。

例えば当時流行した忠の字踊りを(紅衛兵の踊り)30時間も踊り続けたり

鼻血をいっぱい出してそれをインクにして大字報を書いたり

裸の胸に毛沢東バッチを直接さしたりすることで毛首席とその路線に対する忠誠心が認められ特別に紅い階級でない者も紅衛兵になれた例があります。でもそおゆうユニークなアイデアの浮かばない者が自分の政治的立場を主張する時は誰かを告発し糾弾するのがポピュラーなやりかたでした。そしてその誰かが身内であればされはさらに効果的だったのです。

文革が発動されてからはそれまで以上に日帝の鬼の子に吹く風当りは強くなっていきました。いや苛められるとゆうことよりも自分が毛首席の路線に敵対する階級であることがとても悲しくて情ないのです。

「なんとしても紅衛兵になりたい!」そこで朱栄はとうとう自分の母親を告発することにしました。でも陳さんはなんと言っても仙人ですから朱栄さんの心がよめます。陳さんは暗い顔で考えこんでいる朱栄に提案しました。

母親の代りに自分を告発するように言ったのです。朱栄としても自分を苦労して育ててくれた母親より突然現れて居候しているじいさんの方が告発し易いです。朱栄は提案を受け入れました。

息子が父を糾弾する集会は大いに盛り上りました。親を告発するとゆうことだけでなく本まもんの仙人をやっつけるのも前代未聞ですから。陳さんは当時流行っていたジェット式とゆう姿勢を長時間とらされたのですが骨を柔かくする術を使ったのでわりと平気でした。

打倒された者は牛小屋と呼ばれている部屋に監禁されるのですが陳さんは細い格子窓の間をすり抜けて時々家に帰り親子三人で晩御飯を食べたりしました。朱栄は紅衛兵になれたし、朱芳さんに罪ほろぼしが出来て陳さんは良かったと思いました。

完